

(図表 6) 成長期待分野の雇用創出効果

		就業者数増加数 (万人)		
		平成5 (1993) 年 → 平成12 (2000) 年	平成12 (2000) 年 → 平成22 (2010) 年	平成5年 → 平成22年
自由で 活力ある 経済社会 関連分野	情報通信関連	約 60	約 93	約 153
	企業活動支援 関連	約 66	約 67	約 133
	人材 関連	約 5	約 3	約 8
豊かで安 心できる 暮らし 関連分野	医療保健・福祉関連	約 114	約 69	約 183
	余暇・生活関連	約 126	約 67	約 193
	良質な住宅関連	約 39	約 3	約 42
	環境 関連	約 11	約 7	約 18
合 計		約 421	約 309	約 730

(注) 合計の一部に重複が存在することについては、図表2参照。
成長期待分野の範囲については、図表3参照。

21世紀のくらしのビジョン
(経済審議会豊かで安心できるくらし部会報告別添)

21世紀のくらしのビジョン

経済審議会豊かで安心できるくらし部会では、今後の経済社会の動向を踏まえつつ「豊かで安心できるくらし」を実現するための施策の方向性を検討した。

本資料では、21世紀に実現しようとする望ましいくらしがどのようなものかについて分かりやすい「21世紀のくらしのビジョン」を、各世代ごと（子育て世代（20歳後半から30歳代）、壮年世代（40歳から50歳代）、高齢世代（60歳代以上））に提示する。また、各世代ごとの実際のくらしぶりのイメージも示してみた。

もとより、ここで提示する「21世紀のくらしのビジョン」は、さまざまな施策の適切な組み合わせによって実現されるものであり、そのためには、国民、企業、政府それぞれが相応の負担を分かち合うなど、最大限の努力と貢献が必要とされるものである。また、いうまでもなく、この「21世紀のくらしのビジョン」に描かれたくらしが実現されるためには、活力ある経済社会の構築が前提となるものであり、規制緩和などの構造改革を遂行していく必要がある。

なお、くらしのイメージはあくまで施策が実行された場合のくらしぶりの参考例であり、実際には種々の生活イメージが描けることについて留意する必要がある。

各世代のくらしのビジョン

①子育て世代のくらしのビジョン	136
②壮年世代のくらしのビジョン	143
③高齢世代のくらしのビジョン	150

子育て世代のくらしのビジョン

(1)就業と子育て

- ・ 男性の意識改革や労働時間の短縮により、夫婦が共同して家事や子育てにあたるようになり、女性の負担が軽減される。
- ・ 裁量労働制、フレックスタイム制、情報通信システムを活用した在宅勤務等の導入により、労働時間の配分をある程度自分で管理し、子育ての時間を確保しながら効率的に働くことが可能になる。
- ・ 就業形態の多様化に加えて、保育時間や低年齢時の子どもの保育等への対応等が柔軟な保育サービスが多く提供されるようになるため、就業と子育ての両立が容易になる。
- ・ また、民間サービスが参入しやすくなるため、利用料補助を活用し、延長保育等のサービスの内容や料金に応じて保育サービスを選択できるようになる。
- ・ 企業が従業員のために保育サービスを提供するようになり、子育て世代にとって働きやすい職場が増える。また、このような企業が優秀な人材を集めることができるようになる。
- ・ 育児休業の取得が女性のみならず、男性についても一般化し、休業後の職場復帰に備えた職場復帰プログラム（情報提供や講習等の措置）が充実する。そのため、育児のために退職する人が少なくなる。退職した場合も、再就職支援のための講習の受講等を経て再就職する人が増加する。
- ・ 在宅で、情報通信ネットワークを利用した育児支援情報、休業後の職場復帰のための職業訓練プログラムなどを活用することができる。

ある子育て世代のくらしのイメージ

- ・ 結婚後も夫婦とも就業を継続したが、夫婦の育児・家事分担は全く平等で、夫は「洗濯」、「料理（食器洗い）」、「掃除」等手間の係る家事も積極的に行っており、妻の負担は軽減されている。
- ・ 夫はシステムエンジニアという職種柄、自己の都合で勤務時間等を管理できるので、家庭での時間配分も自分で管理できる。また、在宅でも通信機器を利用して仕事を行うことができる。
- ・ 妻はフレックスタイム制をとっている職場に勤務しており、家庭内の用事を犠牲にすることはない。
- ・ 子どもが乳幼児期には夫婦で交互に育児休業を取得し、育児に専念できた。
- ・ 夫は仕事柄スムーズに職場復帰した。妻は職場復帰の前にパソコンネットワークで在宅で復帰プログラムを受けた。
- ・ 職場復帰後の育児は、契約型の保育園に入所させた。保育時間等について柔軟に対応してくれるので安心して就業できる。しかも利用料補助もあり費用負担は軽い。
- ・ 希望通りに三人目の子供を産むことにした。

(2)所得・消費・貯蓄・資産

- ・ 民間市場を通じたサービスの提供が増加し、競争原理が働くことにより、保育サービス等の価格が低下する。また、保育サービス利用者への利用料補助や幼稚園の入園料・保育料減免によって、子どもを持つことによる経済的負担が小さくなる。
- ・ 学歴社会の是正、人生の特定の時期に集中した教育投資意識の見直しなどにより子どもの教育費支出が少なくなる。
- ・ 内外価格差の是正・縮小により、安い商品が手に入るようになり、生活が一層楽になる。一方、消費者にも商品の善し悪しを判断する力が求められるようになる。
- ・ 夫婦2人で働くことで所得が増加し、税、社会保障負担等、社会を支える負担力が向上する。

ある子育て世代のくらしのイメージ

- ・ 出産費用の補助があること、保育園の費用が受けるサービスに応じて適正なものとなっていること、さらに利用者補助もあることから、その子育てに関する費用負担はあまり感じない。
- ・ これまでは、アメリカの大型小売店から気に入った洋服などインターネットを使って個人輸入していたが、内外価格差が縮まってきた今は、近くの大型小売店で同じ品物が安く購入できるようになった。
- ・ 夫婦2人で働いているので収入面での不満はそれほどない。

(3)住まい

- ・ 建設コストの低減、定期借地権付き物件の増加等により住宅の低価格化が進み、子育て世代でも住宅を取得することが容易になる。
- ・ 良質な賃貸住宅の増加、住宅価格の低下等により、子どもの数の増加、成長に従って、より広い住宅へ住み替えることが一般化する。
- ・ 都心部に周辺環境にも優れた良質な住宅が供給され、都心居住が進むことによって、通勤負担が軽減され、家族で過ごす時間も増え、都会のライフスタイルも満喫することができる。
- ・ 特に、賃貸住宅は、勤務地、教育、自然環境、医療、休暇、文化、住環境等の多様な欲求について能動的立場で、生活拠点の移動を図りうるのが魅力である。

ある子育て世代のくらしのイメージ

- ・ 子どもができて都心居住の利便性は捨てがたく、アパートから同じ区内の賃貸マンションに住み替えた。子ども部屋が必要になる頃にはまた引っ越しなければいけないが、最近では、無理のない負担で、環境に優れた郊外の通勤1時間程度の定期借地権住宅が購入できるので、今後の住み替えは、郊外の一戸建てか都心のより広いマンションにするか思案中である。

(4)健康・医療等

- ・ 自分の都合のよい時間に子どもを連れていけるかかりつけの診療所等が充実し、市町村保健センターと合わせ、身近に子どもの健康等を相談できる体制が充実する。
- ・ 仕事と家庭の両立のために、疲労の溜まりがちな女性のための健康診断体制、健康相談体制が充実する。
- ・ 労働時間短縮やフレックスタイム制の導入等により都合のよい時間帯にスポーツ施設を利用することができるようになり、スポーツをしたいけれどもできないという状況が解消される。

ある子育て世代のくらしのイメージ

- ・ 子どもが病気になると最初は狼狽していたが、かかりつけの診療所や市町村保健センターにいろいろ相談にのってもらって最近では落ちついて対処できるようになった。
- ・ 子どもの病気が続いて疲労気味だったので、定期健康診断で異常なしとされて安心した。

(5)学習・教育（自己啓発）

- ・ 労働時間の短縮やフレックスタイム制の導入等に加えて、専門学校や大学で様々な講義科目を夜間、早朝、休日等に学んだり、自宅でインターネット等を通じて学習したりすることが可能になる等、受け皿整備も進み、生涯学習が盛んになる。
- ・ 技術の発展に対応して、自ら職業能力を維持し、また、キャリアアップを図るためのリフレッシュ教育も一般化していく。

ある子育て世代のくらしのイメージ

- ・ 妻は大学の社会人コースに再入学して、大学時代からのテーマである「日本-朝鮮半島文化交流史」の研究を続けることにした。インターネットの利用により、海外の研究者とも直接意見交換ができるなど、大学時代よりも研究の幅が広がった。

(6)余暇・社会参加

- ・ 長期休暇が普及し、レジャー、短期留学等、様々な過ごし方が選択されるようになる。
- ・ 交通機関の発達等により、さらに短時間でリゾート地等にアクセスすることができるようになる。
- ・ ベビーシッターを雇うことが容易になったり、子連れでも気にせず外食できる場所が増加したりすることで、子どもがいることによる余暇活動や社会参加を行う上での制約が少なくなる。
- ・ 身近な自然から遠隔地のすぐれた自然まで、多様な自然とふれあうことのできる機会が確保される。

ある子育て世代のくらしのイメージ

- ・ 今年の長期滞在型の休暇は就学前の子供とともに、家族全員で山間地の農家に泊まり、農作業を体験することとした。山間地への交通の便もよくなり、短時間で行くことができるようになった。
- ・ 夫婦とも介護の基本的な技術講習を受け、地域の特別養護老人ホームで月2度ほど介助ボランティアをしている。なお、緊急時はいつでも介護要請に応じられるように地域のボランティアセンターに登録している。
- ・ 週末には子どもと一緒に近隣の緑地やせせらぎを訪ね、自然観察会に参加したり、昆虫採集、水遊びをしている。

(7)災害への備え

- ・ 住宅・社会資本等の耐震性の強化が進み、地震が発生した場合の被害の軽減が図られる。また、水害、がけ崩れ等への対策が進む。
- ・ 地震保険への加入率が高まる等、個人レベルでの地震への備えが進む。
- ・ 災害時に備えたボランティア団体の組織化、ネットワーク化が進み、これにより地域住民間の連携も深まる。

ある子育て世代のくらしのイメージ

- ・ 現在住んでいる賃貸マンションは耐震性能も優れ、避難場所も隣接した公園が指定されており、安心してらせる。近くの川は大雨のたびにあふれていたが、今はその心配もなくなった。
- ・ 災害時に備えた訓練は学校、地域、職場の連携をとった訓練を行っており、子どもとの緊急時の連絡等不安はない。